

ミミック姦・カントボーイ

- ♡喘ぎ、濁点喘ぎ
- 触手・媚毒ガス
- 丸呑みレイプ・快樂墮ち
- 二穴攻め・クリ攻め
- ザーゲロ・腹ボテ
- 洗脳・脳クチュ・快樂墮ち

「ふん、別にパーティなんて組まなくても余裕だっつーの！」

とある街からしばらく歩いた森の中にあるダンジョンの中、紫色のミディアムショートの髪を持つ青年は宝箱を前に鼻を鳴らした。

青年の名はハイド。シーフクラスに就く冒険者であり、どこにでもいる普通の、平々凡々な冒険者。ただ、今日はちょうどいいパーティが見つからず、一人でソロでダンジョンに潜っているだけ。

そんなハイドの目の前には、美しい煌びやかな装飾が施された豪華な宝箱がある。シーフらしく、隠れつつダンジョンを進んだ先で見つけた隠し部屋の中で発見したのだ。

罠をいくつも解除した先で見つけたお宝に、ハイドは目をきらきらと輝かせる。

この宝箱の中にはきっと大変なお宝が眠っているに違いない。うきうきと弾む心のままに、ハイドは宝箱を開いた。
の、だが。

「お宝お宝〜っと……はあっ！？」

開いた瞬間視界に入ったのは、ダンジョンの薄明かりを反射して輝く金銀財宝、あるいはみたこともないようなアーティファクト.....ではなかった。

中に見えたのは赤黒い、あるいはピンク色の新鮮な肉の詰め合わせ。そして箱の縁をぐると囲うように存在する鋭い牙だ。

（しまった、ミミックだ.....ッ！）

気づいたときにはもうすでに遅かった。

目にもとまらぬ速さで一番太い肉の鳶—舌がハイドの胴体に巻き付き、すさまじい力で引き込んでくる。

箱の中には様々な太さ、形状の悍ましい触手が収まっており、手や足、顔へと伸び、舌と一緒にハイドを宝箱の中へと押し込んだ。そして勝負は舌に巻き付かれた時点でついている。

戦闘力のそれほどない凡シーフには、舌を切り裂きミミックを倒すだけの力はない。

「んっぶ、っう！？」

なんとか箱の縁を手で掴んで抵抗しようとするが、縁に素晴らしい歯並びの牙がびっしりと生えている。牙に手が触れた瞬間ずたずたに引き裂かれた……なんてことはなく、歯は粘液を纏っていて、ぬるりと気持ちの悪い感触をハイドに伝えてきた。

そしてぬるぬるの牙のせいで縁を掴むこともできず、ハイドはミミックの箱の中に頭から突っ込んでしまった。

「ひゃめ、んぎゅっ……しょくひゅ、くひのなかつはい、ってえ……くる、にゃっあゝ……！」

まず感じたのは生暖かい肉の温度と感触。突っ込んだ瞬間、口と鼻を平べったいマスクのような形の触手が覆ってしまった。他にも耳、鼻の穴……ありとあらゆる穴に細かいイソギンチャクのような触手が殺到する。振り払おうにも狭い箱の中、それも逆さの状態だ。ろくに抵抗などできない。

「やめ、っおげえ……っうぶ、んぐ、っぎゅっ……！？」

ぷしゅっ……シューッ……。

甘ったるい匂いのガスが勢いよくマスクの内側に噴き出してきて、とっさに息を止める。

苦しい。吸い込みたくない。だが、呼吸を長い時間止めることなどただの人間には不可能であり、結局見るからに怪しいガスで肺を満たしてしまう。

その瞬間、意識がどろりと溶け始めた。全身に甘い痺れが走り、頭の中が靄でいっぱいになってしまう。逃げなければ。逃げなければならぬのに、頭が動かない。

(もう、駄目だ……俺、死ぬのか……?)

意識がもうろうとする中、手足をばたつかせて抵抗するものの、ミミック相手にはかすり傷一つつかない。

手から短剣が落ち、そのまま全身から力が抜ける。意識を失ってしまったのだ。

完全に抵抗が失われたのをいいことに、口から触手を引き抜いたミミックはハイドの全身をずるっ……ずろろっ♡と飲

み込んでいき、偽の宝箱の中に収めてしまう。ミミックの中で、ハイドはまるで赤ん坊のように丸くなって収納された。

つま先まで完全に飲み込んだところでばたと宝箱の蓋が閉じる。がたがたと揺れていた宝箱は、それと同時にぴくりとも動かなくなった。

ミミックの主食は人間の体液である。ミミックに限らず、ダンジョンの中に住まう魔物というのは多くがそうだ。

宝箱の中は無数の触手に覆われており、その触手を器用に使って快楽を与え、獲物の体液を搾り取る。生かさず、殺さず、ミミックが満足するまでそれは続けられるのだ。

哀れ、ハイドもまたそうなる運命だった。

狭く暗い宝箱の内部で、ぐったりしたままのハイドは装備していた軽鎧を溶かされ、生まれたままの姿にされてしまう。

しかし、一つおかしな点がハイドの身体には存在した。股間には男性器が存在せず、代わりに女性器.....おまんこがついていたのだ。

ハイドはいわゆるカントボーイであり、冒険者になる前も、なった後も、パーティーメンバーにすら秘密を明かして

いなかった。長期的なパーティを組まない理由がこれだった。バレたくないのだ。

しかし、ミミックにとってはハイドがカントボーイだろうとかまわない。精液でも愛液でも食事になるのだから。

「っん、う……く、あ……♡」

触手がハイドの全身を値踏み、あるいは検品するようにまさぐっていく。

気色の悪い肉蔭にまさぐられるたびに、ハイドの口からは艶っぽい吐息が漏れ出てきた。明るいところで確認すれば、ハイドの身体は全身ほんのりと薄ピンク色に染まり、なんの価値もないはずの豆粒みたいな乳首がツンと勃っているのが見えるだろう。

先ほどミミックがハイドに嗅がせたのは高濃度の媚毒ガスだったのだ。当然、ハイドから食料となる体液を効率的に搾り取るためだ。

ミミックは決して人間の命を脅かさない。なぜなら極上の食料だからである。口からかばりとマスク型の触手が外され

るが、宝箱の内部全体に媚毒ガスは満ちており、この場に囚われる限りひたすらかがされ続けることになる。

マスク型の触手は最初の一步.....宝箱の中、密閉空間に獲物を効率よく閉じ込めるためにミミックが進化した結果だった。

うぞりうぞり。様々な太さの触手が赤ん坊のように丸まったハイドの身体のあらゆる場所に伸びてくる。

足の裏をくすぐられ、ねちりと音を立てる触手が尻や平らな胸、手足に絡みつき、あふれ出す快感にハイドはとうとう目を覚ました。

「っあふ.....んい.....?っあぐ、おれ、きぜつ、してっえ!?♡♡♡」

口から一番に飛び出したのは、困惑の声だった。しかも、その声にはハイド自身が今まで聞いたことのない甘ったるさが含まれていて、訳が分からなかった。

しかし、そう思ったのとほぼ同時に、少し遅れてこれまた生まれて初めての暴力ともいえるようなすさまじい快感が襲ってきた。

心臓がどくどく跳ね、子宮がきゅんきゅんっ♡と疼き、勝手に愛液を溢れさせる。そりゃあ自慰くらいはしたことがあるが、そんなものと比べるのもおこがましい、脳みそが焼けるような快感だ。

「あ、え……？♡♡♡」

ぷしっ♡ぷしゃっっ♡♡♡

イボのついた触手がポルチオを外側からぐっぐっ♡と押された瞬間、勢いよくおまんこから潮を噴く。

当然これも初めてで、ハイドは快感に息もできず、もがいて逃げようとした。しかし、手足は触手に絡めとられている上、ここは狭い狭いミミックの箱の中。ぶにぶにの気持ちの悪い肉塊に手や足が触れ、その感触のおぞましさに縮み上がると同時に、己が今どういう状況なのかを今さら思い出した。

（俺、ミミックに飲み込まれて……！このまま消化されて死ぬのか！？）

ハイドは罠の知識こそそれなりにあったが、魔物に対する知識はおざなりだった。

それ故、ミミックがこうして人間の体液を主食にしている、頭がおかしくなって精神がぶっ壊れるほどの毒のような快感を与えてくるなんて考えてもいなかった。

しかも、ハイドは処女だ。カントボーイであることを恥とし、ずっと秘密にしてきたのだから。

当然ハイドの気持ちなんてミミックにとってはどうでもいい。先端がブラシのようになっている触手が一本、尻側からハイドの無防備な潮を噴いてべしょべしょに濡れたまんこにそおっと忍び寄っていた。

「っうあ♡っひ、やだ、はなせっ……だせ、っはひゅ、んううう～～～ッ！？♡♡♡やだ、おまんこっ、擦らない、っでえ……！」

おいしい潮と愛液を舐め取るべく、触手がずりずりと割れ目を擦り上げ、舌のような触手がぺろぺろ体液を舐めとってくる。

媚毒で敏感なおまんこはたったそれだけでも、簡単に達してしまう。

「んぎ、っい！？♡♡♡っかふ、っあ、ァ、なに、っこれえ♡♡♡」

ごしゅごしゅ、ごしゅん♡♡♡すりっ♡すりっ♡くちゅん♡♡♡ぬり、ぬろおおっ、ぬりゅっ♡♡♡

尻側から何度も何度もブラシ触手が股を通り抜け、ハイドは涎や涙、鼻水を垂らしながら悲鳴をあげる。

触手の先端には柔らかな繊毛がびっしり生えていて、股を通り抜けるたびに秘唇とクリトリスをめちゃくちゃに刺激してくる。媚毒で普段の何倍、いや何十倍にも感度を高められた身体はダイレクトに快感を感じ、たったひと擦りされるたびにイき続ける羽目になるのだ。

処女だというのにまんこは愛液まみれで、受け入れる体制を勝手に整えていく。ぴっちりとは閉じていたはずの割れ目は、度重なるブラシ触手の愛撫によってどんどんくぱあ♡と、貝が開くかのように緩み、ほぐれ始めていた。

(気持ちいいっ、なにこれ、しらにゃっ.....しぬ、きもちよすぎて、しんじゃう、っうゝ♡♡♡)

逃げなければとか、怖いとか、存在していたはずの理性は木っ端みじんに破壊されてしまう。

処女だというのに挿れられたこともない膣は勝手にとろっとろに解れ、触手ちんぽを受け入れる準備を始めている。

子宮だっきゅんきゅん疼いて、早くここまで来て♡キスしてほしい♡とメスとしての本能に目覚めつつあった。

危険感知能力を失い、ハイドは目にハートマークを浮かべ、半開きの口から舌を垂らす。

暴れてめちゃくちゃに振り回そうとして失敗していた腕や足も大人しくなり、狭い箱の中で赤ん坊のように丸まったまま、背をしなせたり手や足先を丸めて快感を逃そうと必死に無駄な抵抗を行った。

もっと気持ちよくなりたい。欲しい。おまんこにおちんぼが欲しい♡

気づけば忌み嫌っていたカントボーイのメスとしての本能が活性化し、雌臭い体液をまき散らしていた。

そして.....ミミックは当然、獲物の変化に気づいていた。

成人男性のちんぼくらいの太さの触手がゆらゆらとハイドの口の前にやってくる。ハイドはそれを忌み嫌うでも噛みつくでもなく、口を開いておいで♡と言わんばかりに誘って見せた。

「れろ、ちゅっ……あまあい、おいし……れろ、はむっ……
じゅぽぽっ、じゅるっ♡♡♡」

開いた口に触手が勢いよく入り込み、喉奥まで一気に擦り上げる。口蓋から咽頭にぶつかり、気道を埋められ、脳天に落雷のような快感が直撃した。

別に性感帯でもなんでもないはずなのに、喉を擦り上げられるたびに腰が勝手にびくっ♡びくんっ♡と勝手に跳ねる。そのたびに背中や肘、尻、ありとあらゆる場所が肉の壁にぶつかり、痛みではなくぬるぬるとした不快な感触を与えてきた。

しかし、その忌避すべき感触を、ハイドはだんだんと気持ち悪いと思えなくなっていた。

それどころか自ら触手に舌を這わせ、粘液を舐め取り、啜っていた。

「っお、んむ、おごっ……っが♡れろ、れろおっ……んむ、
ちゅううううゝっ♡♡♡」

気持ちいい。もっと気持ちよくなりたい！

ガスよりも濃い媚毒粘液を経口摂取してしまい、ハイドの
頭から理性という二文字がとうとう、いや、早くも消えてし
まった。

まんことクリを自らブラシ型触手にへこへこ腰を揺らして
擦りつけ、甘イキしながらハイドは自らちゅうちゅう触手に
愛おし気に吸い付く。

ミミックはそれを確認し、獲物の下ごしらえを次の段階へ
と移行することに決めた。

もはや押さえつける必要もないと判断され、手足に絡みつ
いていた触手がするすると離れていく。それとほぼ同時に口
と股を虐めていた触手もいなくなり、ハイドは寂しさと物足
りなさを感じ、鼻にかかった甘ったるい声をあげた。

「っおほ♡はひゅっ……なんで、っえ……やめ、るなよおっ
♡寂しい、疼いて、腹がきゅんきゅん、いいやが、るっ
……♡♡♡」

感度を思いっきり高められたところで股をごしごし擦られ、しかもそれを理不尽に勝手に取り上げるなんて酷い。

目にハートマークを浮かべながらハイドが訴える。それにこたえるように、ミミックは体内で新たな触手をいくつかハイドへと差し向けた。

先が膨らみ、イボのついた成人男性の腕の太さくらいのグロテスクな触手と、糸のように細い触手が何本か。それぞれ涎を垂らす濡れそぼったまんこと、真っ赤に充血し勃起したクリトリスにそれぞれ近づいていく。

「きた、触手きたっあゝ……♡あう♡こりえ、いれる、のか
……?♡」

ハイドは清く正しい処女カントボーイである。一度たりとも膣に異物を受け入れたことはない。

得体のしれないモンスター、怪物に処女を奪われようとしているのに、今のハイドは少しも嫌悪感を感じなかった。狭い密閉空間でもぞもぞと身体を動かし、尻を上げて膝を開く。

もちろんそう大股開きはできないが、それは羞恥心からではなく狭いからだ。

「はっ……♡はっ……♡」

期待を胸いっぱい宿し、腰をへこへこ前後に揺らす。それはまるっきり、発情期の雌が雄を誘うかのよう。

当然ミミックにこんなもので興奮する趣味はない。ハイドはただの獲物だ。しかし、食欲は増す。自らミミック様の餌を献上しようという殊勝な心掛けには見えるからだ。

「んうううゝッ♡♡♡」

味見するように、糸触手がツンッ♡とクリトリスを弾き、下半身全体に波のように快楽が広がっていく。

思わず喉の奥から高いうめき声が漏れるくらい、それだけでも気持ちいい。普通なら、こんなに、これだけで達してしまいそうなほどの快感を得るわけがない。

全ては媚毒ガスのせい。まあ、ハイドに雌の素質があったのかもしれないが。

「も、もっとお……♡もっとちょおらい、くりとりすっ、
いっぱい、虐めてえ……っおほお♡♡♡」

つんつん、しゅるる、むぎゅっうううううッ♡♡♡

つついた後、糸触手は今度はクリトリスに巻き付き、ぎゅうっ♡ぎゅうっ♡と引っ張り始めた。しかも、ちぎれてしまうのではないかと思うほど力強く。

神経の通っている場所をそんな風に引っ張られれば痛みを感じそうなものだが、恐ろしいことに狂おしいほどの快楽しか感じない。

「んぎゅっ♡っぎい……ッァ♡しゅご、くり、くりのび
ちゃっあ♡♡♡」

ぎゅっぎゅっ♡ぐにいいいっ♡♡♡

ぐいぐい敏感なクリちんぽを引っ張られながら、ハイドは悲鳴のような喘ぎを上げる。ぷしゃっぷしゃっ♡♡♡と潮を噴きながら達し、腰を前後にへこへこ揺らす。

潮をまき散らせばミミックが喜び、すぐさま別の触手が寄ってきて、ぺろぺろじゅるじゅる一滴残らず体液を舐め取った。愛液だけでなく涙も鼻水も涎も汗も、ありとあらゆる体液を味わいつくされていく。

脇やわき腹、首筋.....ただでさえ媚毒で敏感になっているところを刺激され、ますますとろとろ愛液をひっきりなしに膣から零す。

ああ、なんて優秀な餌だろう。ミミックは捕まえた獲物に満足し、よりいっそう激しく攻め立て始める。

まんこの近くで揺れていたちんぽ触手が膣の入口に押し当てられる。するとおまんこは一瞬でソレをご主人様と認め、ひくっ♡ひくんっ♡とろおっ♡と収縮しつつ愛液をまた垂らした。

「おちんぽさまっ♡っはへ♡はへえっ.....♡はやく、ほしっ♡っぎい〜〜〜ッッ♡♡♡」

どちゅんっ♡

優しさもへったくれもなく、揺れるまんこの奥まで一気に触手が貫いた。処女だとか、そんなものはミミックにとってはどうでもいい。もっともっとおいしい食事が欲しい。ただそれだけだ。

ぶち、ぶちぶちぶちっ♡

脳内に響く音とともに処女膜が一切の情緒もなくあっけなく破られ、まんこから真っ赤な鮮血が零れた。

本来なら鈍い痛みを伴う初体験は、そんなものを感じさせないほどの苛烈な快感で上書きされてしまう。綺麗なサーモンピンクのおまんこは慎ましやかだったはずなのに、触手ちんぽを受け入れるためにめいっぱい開かれていた。

「っおほ♡っあへえゝ♡イツ、た.....♡また、おしおでちゃあゝっ、おれ、しょじょなのに、っいゝ♡♡♡
あっあっ♡うごいちゃ、やだあゝ っ.....イツたって、いったじゃないかよおっ！♡♡♡」